
糞の歌

浅井 健二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

糞の歌

【Nコード】

N18870

【作者名】

浅井 健二

【あらすじ】

母親を亡くした12歳の俺は、再婚相手のおっさんと二人っきりの生活を始める。

ひねくれた俺が出会った親の愛情について書いてみます。

こてこての感動モノの予定です。

12歳。オヤジができて、母親を失くした。

「なあ、母ちゃん。なんでそいつなんだよ。もっとまともな男がいるだろう」

そんな俺の抗議も空しく、母親の意志は固かった。

12歳。

中学一年生の6月。

長い梅雨で、月の初めに降り始めた雨は、25日を過ぎても止むことなかった。おかげでランニングと腕立てばかりの部活はずっと休みで、入部一カ月でやる気をなくしていた俺は、これを機に完全なる幽霊部員化する決意を固めていた。

そんな時、母親から再婚の話が聞かされた。とりあえずその人に会ってほしいと言う。

再婚。新しい父親。

会う前に聞かされた情報は、大企業に勤めるサラリーマンということだった。

その話を聞いて俺は不覚にもちよつと浮かれてしまった。

想像してしまった。

スーツをパリッと着こなして、さっそうと会社へ向かうカッコいい父親の姿を。

酒の飲み方を教えてもらったり、人生のアドバイスを面倒臭そうに聞くのもいいかもしれない。

女のことで悩んだら相談できるかもしれない。

口では「何で俺が行かなきゃ行けねえんだよ」っていいながらも内心まんざらでもなく、待ち合わせのファミレスに母親に連れられて行った。

「君がたけしさん？よろしく」そう言つて手を差し出した新しい父親は、ダサかった。

猛烈にダサかった。

小太りチビでバーコードハゲ。

よくもまあ、こんなに3拍子そろつたもんだ。

ブサイクの3冠王だ。

俺の心は0.1秒でシャッターを下ろし、頭はそっぽを向いた。

ダサい大人は嫌いだ。

「たけし。ちゃんと挨拶しなさい」そう言つて母親に頭を小突かれたが、「うるせえ」と言い返した。

俺の気持ちとは裏腹に再婚話はとんとん拍子に進んだ。

1カ月後、俺達はハゲのおっさんが買ったマンションに引っ越した。

ピカピカ3LDKだ。母ちゃんと二人で住んでいたおんぼろアパートとは段違い。

俺の部屋も用意されてた。ご丁寧に、新しい勉強机や、オーディオ、ベッドなんかも備え付けられていた。

でも、そんなことくらいで簡単に心を許したりしない。

次の日、タケルに相談した。

「あのおっさんを追い出すにはどうすればいいと思う？」

タケルには、母親の再婚や、新しい父親が猛烈にダサいことなんかはすでに話していた。

「追い出すって、おっさんの買ったマンションだろう？」

「でも、あのおっさんと一緒に暮らすなんて嫌なんだよ。とにかく、母ちゃんとおっさんが離婚してくれればいいんだ。別におんぼろアパート暮らしに戻った方がいい」

「まあ、そんなに嫌なら地道に嫌がらせをするしかないだろうな」「どうすりゃいいかな？」

タケルはこういう時知恵が廻る。嫌がらせのアイディアなんて、売るほどに出てくる。悪意の沸き出る魔法の泉だ。

タケルは少し考えて、「こういうのはどうだ」と言った。さすがタケル。頼りになるやつ。

深夜2時、俺は母ちゃんとおっさんの寝室に忍び込んだ。

おっさんと母ちゃんは同じベッドで寝ている。

幸せそうな寝顔だ。

許すまじ。

俺は正義のヘッドフォンをおっさんの耳に装着し、オーディオとつないだ。

そして、ニルバーナのCDをセットし、ボリュームを目いっぱい上げてから再生ボタンを押した。

「お父さん。息子の好きな音楽を聞いてみてよ」。

おっさんはしばらく「ううん」と唸った後、びくんびくんと体を動かし、最後には「ギャー」と叫んで飛び起きた。

グッジョブだぜ。コバーン。

音楽の力は偉大だ。

しかし、おっさんは、俺を見て、「ああ、たけし君か。びっくりした」と言っただけで、すぐにまたベッドへ入った。

なんてリアクションの薄いおっさんだ。

面白くねえ。

こうなったら持久戦だ。

それから1カ月、俺はおっさんに嫌がらせを続けた。

おっさんの通勤鞆にエロ本をしこんだり、おっさんが毎日会社に持っていくペットボトルのお茶にワサビを入れておいたり、タケルのアイディアを全て実行した。

なんせ、俺と母ちゃんの幸せのためだ。

しかし、おっさんはいつでも困ったような笑顔を浮かべるだけで、いつまでたっても怒ることすらなかった。

あまりにこたえないので神経がどこいかれてるんだと思った。

「たけし。何で秀人さんにイタズラばかりするの？」母ちゃんがおっさんの代わりに怒ってくる。

困ったような悲しそうな顔だ。

その顔には弱い。

少しグツと来る。

でも……。

違うんだよ。母ちゃん。

俺はおっさんから母ちゃんを守りたいんだ。

二人だけの幸せな生活に戻りたいんだ。

そんな気持ちとは裏腹に、俺の口から出る言葉は「うるせえ」だけだった。

母ちゃんだっていつかきつとわかってくれる。そう願いながら。

次の日、母ちゃんが死んだ。

その日はおっさんの誕生日だった。

ちよっと遠くのショッピングモールまで、ハゲ隠しの帽子を買いに行き、その帰りにトラックに跳ねられたらしい。

その晩、俺は、一睡もせず白い布をかぶった母ちゃんに寄り添った。

その隣におっさんも寄り添っていた。

手には母ちゃんが命と引き換えに買ってきたブランドもののハンチング帽が握りしめられていた。

おっさんがあまりに強く握るのでせつかくの新品の帽子はすでにくしゃくしゃだった。おっさんは俺に何か話しかけてきたが俺は無視をした。憎くて、憎くて口を利きなくなかった。

やっぱり俺が母ちゃんを守ってやるべきだったんだ。
もっと強引に、再婚に反対しておくべきだったんだ。

悲しさよりも怒りが込み上げてきて、おさまりがきかなかった。

「お前が母ちゃんを殺したんだ」

おっさんを睨みながら言ったら、おっさんは俯いたままで何も言わなかった。

俺は絶対お前を許さない。

一生かけてこの償いをさせてやる。

俺は母ちゃんの動かない指を見ながら固く心に誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1887o/>

糞の歌

2010年10月9日17時45分発行